様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ００６７６

研究課題名（和文）公共ホール創生策の隘路と展開策

研究課題名（英文）A bottleneck and development of measures to create public hall

研究代表者
熊澤　貴之（Kumazawa, Takayuki）

茨城大学・工学部・准教授

研究者番号：３０３６４１０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：これまでの公共ホールは貸館としての機能を強く有していたが，現在では住民と協働で公共ホールをつくり，運営管理をすることで，鑑賞者として得られる感覚とは異なる新しい価値が生まれている．そこで，住民参画で運営している公共ホール周辺市民を対象に，アンケートを実施した結果，参画の満足度と機会の頻度は芸術文化に対する普及と継承，地域活動に対する意欲と居場所の形成に肯定的な影響を与えた．次に，住民参画で運営している施設利用者にアンケート調査を実施した結果，心地よい拠点施設の利用が地域の愛着を醸成し，イベント利用型の人は地域交流を強めると，公共空間利用を高める効果が確認された．

研究成果の概要（英文）：Previous public halls had a strong function as a rental hall. Today, new value is born by a management of public hall in cooperation with residents. Therefore, questionnaires for citizens around the public hall which are operated by residents' involvement were conducted. As results, participation satisfaction and frequency of opportunities positively influenced "popularization of arts and culture", "willingness to community activities", "formation of whereabouts". Next, questionnaires survey on users in public hall which are operated by residents' involvement were conducted. As results, the use of pleasant base facilities brought about the attachment of the area, people of the event use type strengthened regional exchange, raised the use of public space.

研究分野：建築都市デザイン

キーワード：公共ホール　公立文化施設　市民参画　運営管理　市民参加

１．研究開始当初の背景

2012 年に劇場，音楽堂等の活性化に関する法律（劇場法）が施行された．施行の背景には，劇場，音楽堂等としての機能を有している施設の多くは文化会館や文化ホールといった文化施設であるが，そこで行われる文化芸術活動は貸館公演が中心となっていることがある．劇場法施行により，公共ホールは貸館としての役割を超え，「人々が共に生きる絆を形成するための地域の文化拠点」「地域コミュニティの創造と再生を通じて，地域の発展を支える機能」を持つ場として「必要な人材の養成を行うこと」「地域社会の絆の維持及び強化を図るとともに，共生社会の実現に資するための事業を行うこと」が積極的に求められることになった．これまで貸館としての機能を強く有する公共ホールが多かったが，現在では市民の独自性や主体性，コミュニティ力を構築する場所として，新しい役割を持ち始めた．今日，住民と協働で公共ホールをつくり，運営管理をすることで，鑑賞者として得られる感覚とは異なる新しい価値や評価が生まれはじめている．現在，ホール設備機器全般のデジタル化が進行する中，全国の市町村において高度経済成長期に建設された地域劇場ホールは老朽化のため，全国で多くの施設が建替えの時期を迎えている．

このような中，住民と協働で地域劇場ホールをつくり，運営管理をすることで，鑑賞者として得られる感覚とは異なる新しい価値が生まれはじめている．しかしながら，住民参画の運営がどのような住民の評価構造を生み出しているかは定量的に把握されていない．

２．研究の目的

市民参画による公共ホールの運営が実施されている事例を対象に，作り方と運営方法を広く把握し，住民参画の運営が実施されている施設の周辺住民や利用者に対するアンケート調査によって，住民評価構造の因果関係モデルを把握した．

まず，住民参画で地域劇場ホールづくりに取り組んでいる茨城県小美玉市四季文化館「みのーれ」を対象に，住民参画の地域公共ホールづくりに見られる住民評価構造の因果関係モデルを把握した．

次に，住民参画が活発な日立市交流センターの利用者を対象に，住民評価構造の因果関係モデルを把握した．

３．研究の方法

（１）施設の周辺住民からの評価抽出

積極的な住民参画で公共ホールを運営している茨城県小美玉市四季文化館「みのーれ」を対象に，市民アンケートを実施することで，公共ホールに対する市民の評価構造を把握した．

茨城県小美玉市（全人口 5 万人，総世帯数 2 万世帯）には，市直営の地域公共ホール，小美玉市文化四季館「みのーれ」がある．小美玉市文化四季館「みのーれ」は 2002 年に旧美野里町に開館した．中ホール 620 席と小ホール 300 席で構成されている．「みのーれ」の運営には住民参加が見られ，活発に住民参画による自主事業が取り組まれている．ここには住民参画の地域公共ホールづくりの過程で，住民は豊かな自己形成を育み，まちづくりの主体形成を醸成するビジョンがある．

そこで，小美玉市の住民に 2000 部のアンケート用紙を配布（1 世帯に一部）し，郵送により 300 部の回答を得た．回収率は 15%であった．アンケート項目については，小美玉市四季文化館「みのーれ」に対する評価項目，芸術文化に対する評価項目，地域に対する評価項目，人づくりに対する評価項目とした．それぞれの評価項目に基づいて，因子分析を実施し，1 以上の固有値を抽出し，因子軸の解釈を実施した．

次に，住民参画で地域劇場ホールづくりに取り組んでいる茨城県小美玉市四季文化館「みのーれ」を対象に，地域劇場ホールの住民参画の程度に応じて住民の態度構造に与える影響要因を把握した．

（２）施設の利用者からの評価抽出

住民参画型の運営が実施されている施設利用者の評価構造モデルを検討した．具体的には，住民参画の運営が実施されている茨城県日立市交流センターを取り上げ，この施設の利用者にアンケート調査を実施し，施設の利用が地域愛着形成，公共空間利用，地域交流に与える影響を定量的に検討した．

アンケート調査では，対象とした施設がまちなかの居心地のよい施設となっているか，この施設利用が地域生活行動に与える影響を把握するために，施設の利用者を対象にアンケート調査を実施した．交流センターは小学校区に対応して位置しているため，アンケートの回答者は該当の小学校区の居住者である．　アンケートの回収部数は 162 部であった．

４．研究の成果

（１）施設の周辺住民からの評価結果

まず，住民参画型の運営が実施されている施設周辺住民の評価構造モデルについて記述する．回答者の年齢層を見ると，40 代以上の年齢層が多いことが分かる．回答者の住年数を見ると，10 年以上の居住年数の方が多い．まず，小美玉市四季文化館「みのーれ」に対する評価の主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った．固有値の変化は第一に 8.725，第二に 1.153，第三に 0.684 であったため，2 因子構造が妥当であった．その結果，2 因子構造が妥当であった．第 1 因子は 12 項目で構成されており，「みのーれの活動に対する満足感」「地域劇場ホールにおける施設や運営管理に対する満足感」「地域住民の

ニーズに対応している」「情報の受発信や住民の相互交流の場となっている」など，施設や管理運営に対する評価の内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，この因子を参画満足度と解釈した．クロンバックのα係数は 0.960 と非常に高い数値であることから，項目の内的整合性が良い．第 2 因子は「みのーれでの活動に関与するきっかけがない」「特定の利用者が使っていると感じる」など，逆転項目とした 2 項目で構成されていた．よって，この因子を参画機会度と考えられた．クロンバックのα係数は 0.641 とやや低く，尺度を構成する項目の内的整合性があまり良くなかったが，逆転項目で構成されたためやや信頼性が低下した．

次に，芸術文化に対する主因子法・プロマックス回転による因子分析を示す．計 8 項目に対して主因子法による因子分析を行った．固有値の変化は第一に 4.957，第二に 1.191，第三に 0.558 であったため，2 因子構造が妥当であった．第 1 因子は 6 項目で構成されており，「みのーれ」の活動で地域に昔からある文化・芸能を記録・保存・継承する機会が増えた」「「みのーれ」で行われる多様なアーティストの舞台公演鑑賞により，芸術文化に触れる機会が増えた」など，「みのーれ」が行っている活動を通して芸術文化が浸透されていることに対しての内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，この因子を芸術文化普及度と解釈した．クロンバックのα係数は 0.922 と非常に高い数値であることから，尺度の内的整合性が良い．第 2 因子は 2 項目で構成されており，「地域の芸術文化を維持することは重要である」，「芸術文化活動を行うことは大切である」など，芸術文化を維持することや芸術文化の活動を行うことが重要であるといった内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，この因子を芸術文化継承度と解釈した．クロンバックのα係数は 0.835 と高い数値であることから，尺度を構成する項目の内的整合性が良いことがわかった．

さらに，地域活動に対する評価の主因子法・プロマックス回転による因子分析の結果を示す．計 14 項目に対して因子分析を行った．固有値の変化は第一に 8.435，第二に 1.982，第三に 1.333，第四に 0.914 であったため，3 因子構造が妥当であった．第 1 因子は 9 項目で構成されており，「地域貢献活動を行いたい」「地域のイベント等に参加するなど，地域住民との交流は必要だ」「地域活動を行うことで自身の生活も豊かになる」など，地域活動に対する意欲が高い内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，この因子を地域活動意欲度と解釈した．また，尺度の信頼性を示すクロンバックのα係数は 0.904 と非常に高い数値であることから，尺度を構成する項目の内的整合性は良い．第 2 因子は 5 項目で構成されており，「地元行政は住民のことを十分に考えている」，「この地域の公共施設は充実している」，「教育や医療などの公共サービスが充実している」など，まちづくりに対して，地域の評価や行政に対する評価といった内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，因子を官民協働度と解釈した．クロンバックのα係数は 0.894 と高い数値であることから，この尺度を構成する項目の内的整合性が良い．第 3 因子は 3 項目で構成されており「まちに自分の居場所がある」「あまり地域になじめていないと感じる時がある」など地域に対して居場所やなじんでいるなど愛着を示す内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，この因子を居場所形成度と解釈した．また，尺度の信頼性を示すクロンバックのα係数は 0.680 と低い数値であり，この下位尺度を構成する項目の内的整合性があまり良くないが，逆転項目で構成されているため信頼性が低くなったと考えられる．

最後に，計 6 項目に対して主因子法による因子分析を行った．固有値の変化は第一に 3.512，第二に 0.942 であったため，1 因子構造が妥当であると考えられた．第 1 因子は 6 項目で構成されており，「仲間に囲まれる安心感がある」，「人に喜んでもらえるようなことができた」など，他人との関わりが持てる環境であり，周辺に対して喜んでもらえることなど，自らが行動を起こせているといった内容の項目が高い負荷量を示していた．よって，この因子は社会包摂度と解釈した．クロンバックのα係数は 0.855 と高い数値であることから，この尺度を構成する項目の内的整合性が良いことが確認された．

以上，「みのーれ」に対する住民評価の因子は参画満足度，参画機会度であり，芸術文化に対する住民評価の因子は芸術文化普及度，芸術文化継承度であり，地域活動に対する住民評価の因子は地域活動意欲度，官民協働度，居場所形成度であり，人づくりに対する住民評価の因子は社会包摂度であることを示した．

分析では「みのーれ」と関与しているか否かによって二つにデータを分け，それぞれにおいて共分散構造分析を実施した．

その結果，関与している住民には，地域活動の意欲が住民参画と社会包摂に有意な影響を与え，地域の芸術文化の継承へ有意差のある直接効果と間接効果を検出した．行政との協働関係は住民参画に強い影響を及ぼし，居場所の形成は社会包摂に強い影響を与え，地域の芸術文化の継承に向けて，有機的に結合するような住民の態度構造が把握された．一方，関与していない住民には，地域活動への意欲が社会包摂に直接効果と地域の芸術文化の継承を介する間接効果を与えた．行政との協働関係が住民参画に影響を与え，住民参加が地域劇場ホールの評価に影響を与えたが，地域の芸術文化の継承には影響を与えなかった．関与していない住民には地域の芸術文化の継承に断片的にしか影響を与えな

いことが把握され，諸要因を有機的に結び付けられていないことが把握された．

以上の知見から，参画の満足度と機会の頻度は芸術文化に対する普及と継承，地域活動に対する意欲と居場所の形成に肯定的な影響を与えることが明らかになった．住民参画の地域公共ホールづくりが住民の態度構造に与える影響は住民の関与を増加させることで，地域の芸術文化の継承に寄与する態度構造のメカニズムを明らかにした．

（２）施設の利用者からの評価結果

施設での活動内容に関するアンケート結果を示す．利用状況に関するアンケートより，利用人数は 5～10 人程度の団体が多いが，20 人以上の団体も存在している．また，利用の頻度が様々であるが，利用者は比較的高い頻度で訪れていることが分かる．さらに，2～3 時間利用する人が半数を占めていた．利用者の年齢層は様々であるが，60 歳以上の占める割合が高いことが分かる．これらからこの施設には利用の頻度や目的が異なるタイプの利用者が存在することが考えられる．一つ目のタイプは，利用頻度が高く，少人数で活動をおこなっている利用型(以下「常時利用型」と呼称)であり，二つ目のタイプは，利用頻度が低く，大人数で施設を利用している利用型(以下「イベント利用型」と呼称)である．そして，利用の目的や使用頻度が異なることから，2 つのタイプの間に，施設の居心地の良さの程度に違いがあると考えられる．常時利用型の人は，施設を普段より頻繁に利用していることから，自分たちの居場所であると認識しており，イベント利用型の人は，施設を行事でのみ利用していることから，非日常の施設と認識していると考えられる．そこで，常時利用型の人はイベント利用型の人よりも交流センターを居心地の良い場所と感じていると考え，両タイプを比較した．

両タイプに振り分ける際，常時利用型は，主にサークル活動等で利用しており，施設利用頻度が月に 1 回以上であるグループ，イベント利用型は，サークル活動などの定期的な活動はおこなっておらず，利用頻度が月に 1 回以下であるグループとした．その結果，常時利用型は 125 人(平均年齢 61.8 歳)，イベント利用型は 37 人(平均年齢 39.9 歳) であることが分かった．さらに，利用者のタイプの振り分けが有意であるか確認するために，交流センターの居心地の良さの程度をもとに t 検定をおこなったところ，有意確率が $p<0.001$ で，常時利用型がイベント利用型よりも居心地の良さが高いことが確認された．

以上より，常時利用型とイベント利用型の間には，施設に関する居心地の良さの程度に差があり，常時利用型はイベント利用型に比べ，交流センターを居心地の良い場所であると考えていることが確認された．

次に，居心地の良さと地域生活行動の間に存在すると考えられる因果構造を明らかにするために，利用者のタイプ別に共分散構造分析を用いたパス解析をおこなった．潜在変数として扱うものは「居心地の良さ」「地域愛着形成」「公共空間利用」「地域交流」の 4 項目とし，それぞれの項目にはアンケート結果から得られた値の平均を用いて分析をおこなった．さらに，常時利用型とイベント利用型の間には交流センターの利用形態に違いがあり，利用頻度の影響が大きいと考えられることから，「利用頻度」を観測変数としてモデルに組み込んだ．分析の結果，有意確率 $p<0.01$ となったパスのみを有効とし，利用者のタイプごとに異なるパスを得た．

常時利用型におけるパス解析の結果，交流センター利用頻度から居心地の良さへの影響が確認された(有意確率 $p<0.01$)．さらに，居心地の良さから「地域愛着形成」「公共空間利用」「地域交流」の 3 項目へのパスがそれぞれ有意であるとされた(有意確率 $p<0.01$)．最後に，「地域愛着形成」から「地域交流」への影響が確認された(有意確率 $p<0.05$)．以上より，次のことが読み取れる．

一つ目に，利用頻度と居心地の良さの関係について，施設の利用頻度が居心地の良さに影響を与えていることから，頻繁に利用することで，気兼ねなく自由に使えるといった感情が生まれ，居心地の良い場所であると感じるようになると考えられる．

二つ目に，居心地の良さと地域生活行動の関係について，居心地の良さが地域生活行動の 3 項目に影響を与えていることが把握された．特に居心地の良さが「地域愛着形成」に与える影響は大きなものであることが分かった．また，「公共空間利用」への影響は他の 2 つに比べると小さく，施設の利用と他の施設の利用との直接の関係はあまりないと考えられる．

三つ目に，「地域愛着形成」が「地域交流」に影響を与えていた．また，居心地の良さが「地域愛着形成」へと影響を与えていることから，居心地の良さが「地域交流」へと間接的に影響を与えていることがわかる．「地域愛着形成」から「公共空間利用」への影響が確認されなかったため，愛着の有無と公共空間利用が無関係であることが分かる．また，「地域交流」から「公共空間利用」への影響が確認されなかったのは，常時利用型の人たちは自分たちのグループでのみ活動することが多く，地域内での活動範囲が狭いことが理由として考えられる．

次に，イベント利用型におけるパス解析の結果を示す．居心地の良さから「地域愛着形成」へのパスが有意であるとされた(有意確率 $p<0.01$)．また，「地域愛着形成」から「地域交流」，さらには「地域交流」から「公共空間利用」への影響が確認された(有意確率 $p<0.01$)．以上より次のことが読み取れる．

一つ目に，居心地の良さと地域生活行動の関係について，常時利用型と同様に，居心地の良さが「地域愛着形成」に影響を与えてい

ることが分かった．このことから居心地の良い場所の存在が地域への愛着を高めていることがイベント利用型でも確認できた．また，常時利用型では検出された施設の利用頻度から居心地の良さへの影響は確認されなかった．これは，イベント利用型の人にとって，あまり居心地の良い場所ではないことが理由として考えられる．

二つ目に，地域生活行動間の関係について，「地域愛着形成」から「地域交流」，「地域交流」から「公共空間利用」への影響が確認された．これは，「地域愛着形成」により「地域交流」への関心が深まり，さらに地域内での行動も活発におこなわれるようになることで，「公共空間利用」の頻度が上がるといったことが考えられる．居心地の良い場所を得ることによって，地域での活動において様々な波及効果に期待ができることが確認された．

三つ目に，「地域交流」と「公共空間利用」の関係について，イベント利用型では，「地域交流」から「公共空間利用」への影響が確認された．これは，「地域交流」に消極的であった人が，人との関わりを持つようになることで，寄り道行動を積極的に行うようになったことが理由として考えられる．地域内でのみ活動するのではなく，他の地域にも活動の範囲を広げていると考えられる．

以上より，2 つのタイプにはいくつか共通する箇所はあるが，それぞれが特徴を持った異なるタイプであることを確認することができた．

以上より，施設を居心地の良い場所と位置付けている常時利用型の人はイベント利用型の人に比べ，地域に対する意識が高いことが把握され，まちなかに居心地の良い場所を持つことが地域生活行動レベルの向上に良い影響を与えていることが考えられる．また，常時利用型の人の利用が大多数を占めていることから，イベント利用型の人にとっては利用しづらい環境になっていることが考えられる．そこで，すべての利用者が施設を居心地の良い場所であると思えるように，両タイプが共存することが可能な施設利用を考える必要がある．

2 つのタイプに共通して，居心地の良さが「地域愛着形成」へ大きな影響を与え，「地域愛着形成」が「地域交流」に大きな影響を与えたことが把握された．また「地域愛着形成」の大きい人ほど地域を大切にし，積極的に地域の活動へと参加する傾向があった．また，イベント利用型の人は「地域交流」を強めると，さらに，「公共空間利用」を強める効果が確認された．

常時利用型の人々はイベント利用型の人々よりも地域生活行動への影響が大きく，まちなかに居心地の良い場所を持つことにより，地域への関心が高くなる傾向が示された．一方，イベント利用型の人々は「地域交流」に関心を持つことで，「公共空間利用」を促す効果が確認された．常時利用者とイベント利用者が持つ因果構造モデルを重ね合わせることで，心地よい拠点施設の利用が地域の愛着を醸成し，次に，「地域交流」を強め，さらには近隣の「公共空間利用」に波及するという地域生活行動デザインが示された．

要するに，住民参画で運営している公共ホール周辺市民を対象に，アンケートを実施した結果，参画の満足度と機会の頻度は芸術文化に対する普及と継承，地域活動に対する意欲と居場所の形成に肯定的な影響を与え，住民参画で運営している施設利用者にアンケート調査を実施した結果，心地よい拠点施設の利用が地域の愛着を醸成し，イベント利用型の人は地域交流を強めると，公共空間利用を高める効果が確認された．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 熊澤貴之，高田大稀，まちなかの居心地のよい施設利用が地域生活行動に与える影響 -冬季・平日の利用者を対象として-，日本デザイン学会デザイン学研究論文集 2018（印刷中），査読有

② Takayuki Kumazawa “A psychological model for cultural policies surrounding residents’ participation in managing a reginal theatre” Proceedings of the symposium of International Association for People-Environment Studies (IAPS)pp.15-21,2017,査読有

〔学会発表〕（計　2　件）

① 熊澤貴之，佐藤慎悟，住民参画の地域劇場ホールづくりに見られる住民評価の因子分析，日本デザイン学会研究発表大会概要集，63(0)，13 頁，2016

② 佐藤慎悟，熊澤貴之，住民参画の地域劇場ホールづくりが 住民の態度構造に与える影響，日本建築学会大会学術講演梗概集 E421-422 頁，2016

〔その他〕

ホームページ等

茨城大学研究者情報

https://info.ibaraki.ac.jp/Profiles/27/0002646/profile.html

茨城大学建築都市デザイン研究室ホームページ

http://urban-design.civil.ibaraki.ac.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者

熊澤貴之（KUMAZAWA，Takayuki）
茨城大学・工学部・准教授
研究者番号：30364102